

学術研究所主催 主題別研究会 報告要旨(4)

第7回 子育て・家族研究会

日 時：平成17年10月24日(月) 10:20~11:50

場 所：第2会議室

話題提供：小泉裕子(児童学科・助教授)

話 題：柏木恵子著『子どもという価値』

—少子化時代の女性の心理—を読む

1980年代後半以降、我が国の少子化傾向は加速し、社会問題として様々な方面で議論を呼んできた。筆者は、幼稚園や保育園における子育て支援を研究テーマにしてきた。子育て支援と言えば一般に、親が子どもを育てるのを支援する対策のことである。我が国の政府は、現代の母親の意識を分析し、母親の立場に立った子育ての支援政策を模索しながら10年以上が経過している。それにも関わらず少子化傾向は下げ止まらず、本年度も合計特殊出生率は1.29となり最低記録を更新している。

女性達は、子供を産み育てることにどのような価値を見いだしているのか。従来『子どもという価値』すなわち「子供を産む、持つことの意味」は自明であると思われがちであったが、柏木(2001)は子どもを産み育てる女性の心理的側面に焦点を当て、現代の母親の意識を再考している。本研究会では少子化の一要因となっている母親の意識変容を取り上げ、本著をレビューしながら、我が国の母親意識に見る『子どもという価値』の時代変容や現在の問題傾向などについて考察、検討を行っていった。

我が国の『子どもという価値』は、欧米のキリスト教思想と比較してもわかるように、子宝思想に代表され、家族の中でもっとも大事な存在というのがその主流であった。たとえば、万葉集の中で山上憶良が謳うように、庶民家庭の中での子どもの存在は、宝よりも勝っているものであった。以来現代に至るまで、我が国の「子どもは宝」思想は根強い。前文部科学大臣による小泉内閣メールマガジンへの寄稿(2004.11)等、その思想が強く表れているものが多い。

一方、柏木は我が国の社会から見る『子どもという価値』は、「子どもは宝」論を前提としながらも、産む側の女性の意識が時代と共に変わっていると指摘する。医学の進歩(エクゾ・マクロ・システム)が人口問題のパラダイムを転換させ、人間の生殖、感情や態度・心理にまで影響を与え、結果出産という行為は「授かる」から「つくる」に変化し、『子どもという価値』が変わってきたと報告している。各世代の母親達を対象としたアンケート(柏木・永久2000)によると、『子どもという価値』観の世代間格差が顕著に伺え、極めて興味深い。柏木は3世代の母親(30,40,60代)300人に「子供を産む理由30項目」の質問紙調査を行い、因子分析から3つの精神的価値(情緒的価値、社会的価値、個人的価値)と2つの経済的・実用的価値(条件依存、子育て支援)を抽出している。60歳代では、「子供を産むのは社会のためであり、次世代を残すことは当然の努めである」とする考え方(=社会的価値)が有意に高い。若い世代では、

「子供を産むのは自分のためである（＝個人的価値）」とする傾向が強く、自身の生活の諸条件を勘案しながら出産を決定する傾向（＝経済的・実用的価値）も強いとしている。この調査結果から、近年の母親達の『子どもという価値』が、自分を中心に据えた人生設計の中の価値－欧米型に近づいていること－が推察できる、としている。しかし、欧米型精神的価値との大きな違いは、子どもへの処遇－「こどもにはできるだけことはしてやるイデオロギー」－に顕著に表れているとも指摘する。たとえば親としてのエネルギーを、経済的・精神的な意味において全力で子どもに注ぎ放出する傾向である。柏木はこのような現代の若い母親達に蔓延する出産の私物化、あるいは＜親の愛情＝してあげる＞のイデオロギーに警鐘を鳴らしている。特に注目した論述は、ジェンダーに関する『子どもという価値』の時代変化である。出産の際の性別願望の推移（厚生省1998発表）では、1972年、1979年には、女兒願望の2倍近くが男児を願望・志向していたが、1987年調査で逆転する。1997年には男児（＝25%）に対し女兒（＝75%）という圧倒的大差で女兒願望傾向が認められている。柏木によれば、親が自分の老後を想定したときの、子どもに託す期待の様相が変化したためと分析し、子どもから老親の経済的支援などを期待する「資源の環流」より、むしろ精神的な面で老後を支えて欲しいという願望＝「精神的価値」に変わったと報告している。

以上、柏木の論述を通して、その時代ごとの社会的要因が、子育ての価値や子どもという価値を決定づける危うさを改めて確認した。少子化現象を人口問題として捉える前に、背後に潜む女性の心理、子どもの価値に生じている変化を社会全体の問題として取り組む必要性も示唆された。日本式育児の風習による影響と科学的子育て観の影響、どちらを優先するかという選択は、母親達の恒常的な葛藤であろう。また、自身のキャリアと子育ての両立か子育て専念かの選択も、女性の永遠の葛藤であろう。

このような中、保育所や幼稚園における少子化対策・子育て支援は、葛藤に生きる女性の心理を共感的に受け止めつつ、子どもを視座においた「親業」へ導く指導的役割も担っている。現在の保育現場における子ども中心主義は、古来からあった子宝思想を踏襲していると誰しも想像するかも知れないが、親の持ち物として子どもを捉える大人中心の価値ではないことに注意する必要があるだろう。子どもを視座に置くとき、子ども中心の支援とは、まず、子どもの人権尊重に根ざすものであることを強調しておきたい。現代の母親達の『子どもという価値』観が、彼女たちの生涯発達の過程で、子ども自身の人権を視座においた価値観に裏付けられ育まれることを望んで止まない。

<引用文献>

柏木恵子, 2001, 子どもという価値, 中公新書

<参考文献>

東清和, 1979, 性差の社会心理, 大日本図書

依田明, 1982, 母子関係の心理学, 大日本図書

正高信男, 2003, ケータイを持ったサル, 中公新書

中江和恵, 2002, 江戸の子育て, 文春新書

品田知美, 2004, <子育て法>革命, 中公新書